

第11回県政知事懇談

湯崎英彦の宝さがし

テーマ【挑戦そして実現！引き出せ広島県の「底力」】

と き 平成22年7月24日（土）

ところ 大竹市立図書館 2階

広 島 県

目 次

頁

開 会	1
懇 談	2
自由討論	37
閉 会	51

開 会

(知 事 (湯崎))

ただいまから県政知事懇談「湯崎英彦の宝さがし」を始めたいと思います。

本日は、土曜日でお休みのところと思いますけれども、今日の懇談会に御参加いただきまして、本当にありがとうございます。

また、傍聴の皆様もたくさんお集まりいただき、本当にありがとうございます。

始まる前に、簡単にこの会の趣旨を御説明させていただきたいと思います。

この県政知事懇談は、各市町で、こうやって10人ぐらいの方々と直接お話をさせていただくという形で進めております。1年間かけて、県内の全市町を回る予定にしております。中身としては、個々具体的な課題であるとか、問題を解決していくということではなくて、むしろ、地域の皆さんがどういったことをお考えになっているか、どういった活動をされているか、そういったものをだんだんと積み上げていくということを目的にしております。いろいろ積み上げることによって、広く県政のことを考える時に必要な基礎をつくっていくというようなイメージでおります。よく私は味噌樽というふうに言っているのですけれども、味噌樽に味噌をためていくと、しばらくするといい味噌ができるという、そんなイメージであります。

もう一つ、市長、町長とお話をする会もやっております、そちらは行政から見た課題等を意見交換するという会であります。

こちらは住民の皆様と直接お話をさせていただくということでありまして、そういう意味ではフィルターのかかっていない、直接のお話になるわけですがけれども、この両輪で県政についていろいろ考えていきたいということで進めているものであります。

私は今、五つの挑戦ということを掲げまして県政を進めているところであります。今年は特にその中でも基盤づくりとあって、ちょうどいろいろな県の計画が改定期にも当たっております、作り直しているところです。県全体の県政の総合ビジョンであるとか、商工、産業の計画、あるいは農林水産の計画であるとか、そういったものをちょうど今年つくっております。そういう中にももちろん、皆様の声を反映させていただくところも多々あるのではないかと考えております。

いずれにしても、今日の目的は直接お伺いをするということでありまして、普段お考えになっていることを率直にお話しいただくのが一番かなということでありまして。そういう意味で、建前的事項ではなく、本当に何でもおっしゃっていただく。まさに忌憚のない御意見をいただくのが一番いいと思っています。

今日は市長も来ていらっしゃいますけれども、ときどき地元の自治体に厳しい御意見が出たりすることもあるのですが、皆さんも県に対しても、市町に対しても、御遠慮されることはありませんので、おっしゃりたいことをおっしゃっていただければありがたいと

思っております。

今日もテレビカメラが入って、かなり最初はかたい雰囲気が始まるのですが、是非リラックスしてお話しいただければと思います。

懇 談

(知 事)

それでは、早速懇談に入らせていただきます。既にお聞きになっていると思いますが、大体お一人5~6分ぐらいお話をいただいて、私とのやりとりも含めて10分弱ぐらいでやらせていただいて、最初に90分ぐらいそれをやらせていただきます。最後、残り30分ぐらいで全員でディスカッションができればと思っておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、最初は池田さんからですか、よろしく願いいたします。

(池 田)

(写真を手に取り)

玄関前のストーンアートです。

(知 事)

ひな流しですね。

(池 田)

今日午前中、知事にストーンアートを見ていただきまして、初対面ではないのですが、私、大竹市暴力監視追放協議会の会長を仰せつかっております池田と申します。我々の会は、対暴力団、対暴力行為の監視、排除活動を本分としております。

会結成以来33年になりますが、活動を通して、暴力団の排除活動も大切だが、まず子どもたちを悪に染めない、悪から守る、これが大人の務め、責任だと強く感じるようになりました。

そんなことから青少年健全育成を目的に、毎年少年サッカー大会を開催しております。今年で16年になります。毎回参加チームも増え、10周年の記念大会のときには、芝の上で競技がしたいという子どもたちの夢をかなえるため、広島ビッグアーチで大会を開きました。必死でボールを追いかける少年の姿には、非行や犯罪の影などみじんも感じられません。スポーツを通して、少年の居場所づくりや非行防止を図っております。

それから、7年余り続けている毎朝のおはようの声かけと見守り活動の実施です。我々の会員と地域の方々、特に定年退職組の人とハローの仲間を結成しました。現在では大竹

市内に十数カ所、80名余りの仲間が小・中・高の児童、生徒が登校する日には、毎朝、おはようの挨拶運動を繰り広げております。今では子どもたちのほうから「おはようございます」の声が返ってきます。シャツを出して登校していた子どもが、いつのまにかシャツをズボンの中に入れて登校するようにならなくなりました。

そんなふうにして、子どもたちと地域の大人がうまくコミュニケーションがとれるようになり、ストーンアートが始まりました。中高生と大人が一丸となって巨石アートを描き、平成16年12月、大竹駅前の緑地公園に最初のストーンアート17基を設置いたしました。現在では市内20カ所、行き交う市民の目を楽しませ、また、子どもたちのふるさとに対する思い出づくりにも役立っています。

2年前から始めた中学2年生を対象にした食育事業、このような活動を通じて感じることは、大人が子どもの目線に立ってコミュニケーションをとれば、大人がいかにか本気であるか、そうすれば子どもたちが必ず本気についてくる。当たり前のことですが、忙しにかまけて、どこかに忘れていたような気がします。

子どもたちからパワーをもらって、これからも事業を進めます。子どもたちと地域の大人たちがうまくふれあっていけば、暴走族も暴力団もない、安心・安全で、明るく、活気にあふれた住みよい大竹市のまちづくりができると信じております。

(知事)

ありがとうございます。もともとは暴力追放運動から始まったわけですね。

(池田)

はい。

(知事)

ですが、例えば暴走族取締りとか暴力団排除ということじゃなく、もっと原点まで返って活動されたらすごく効果があったと、そういう感じで受けとめてよろしいでしょうか。

(池田)

はい。まず、うちの大竹市からは暴走族も暴力団も出さんよと。それが一番の願いです。

(知事)

そうですね。そのためには、暴走族がだめだよと言うだけではなくて、子どもたちと一緒にこういう声かけから始まって、ストーンアートを。

(池 田)

楽しみながらストーンアートをつくったりですね。

(知 事)

まさに根本原因というか、根っこのところから一緒に活動されることがいかに大事かというのをすごく感じます。

もともとそのストーンアートづくりも、ちょっとメモをいただいたのですけれども、大人がこれをやったらというよりも、最初のきっかけは子どもたちがストーンアートをつくっていたのを御覧になって、そこから始められたと。

(池 田)

はい。最初は挨拶運動がきっかけなのですけれども、文化祭に呼ばれまして、大竹高校の子どもが石ころ大のストーンアートですね。それに我々大人が非常に感動しまして、仲間の夢に出てきたのです。まさに今の大きな 10 トン級のストーンアートが町中にあったと。その夢を追おうじゃないかと。大人の夢ですけど、それが始まりで子どもたちと始めました。

(知 事)

でも、その夢が本当に実現してきたということですね。

(池 田)

はい。

(知 事)

もう一つ私が非常に感心するのは、例えばこのストーンアートにしても、費用的に言うとうごくかかるわけではないと思うのですけれども、この石を運ぶというのはなかなか大変かなと。これはどなたかから御協力いただいてやっているのですか。

(池 田)

今、全部ボランティアでやっています。この石をどうやって運ぼうかと困っていたら、ある企業のレッカー屋さんが運んであげようと。石は間屋さんが幾らでもあげるよと。そのうち、挨拶運動の仲間がその石を設置、固定したりと、だんだん仲間が増えまして、現在に至っております。

(知 事)

そういう意味では、お金をかけないでも、まさに子どもたちがみんな元気で、まじめに育っていくという、お金をかけることが大事なのじゃないということが本当にあらわれているような気がするのですね。しかも、みんながそうやってボランティアで手伝うことによって、むしろ活動が広がっているというか、お金を使ってトラックで運ぶとかいうのをやっていたら、きっとそこまで広がらなかったのではないかと感じるのです。

(池 田)

はい。できていないと思います。

(知 事)

ありがとうございます。

それでは、杉嶋さん、お願いします。

(杉 嶋)

先ほどもあいにく館をお訪ねくださり、実際、どのように活動しているかということを見ていただけたので、うれしかったのですが、いつも土曜日に開館しております。いつもあのように子どもたちとお母様方と、絵本、そしておもちゃ、また工作などをしたりして過ごしています。年に数回の行事では、絵本まつり、絵本の講師を招いて本のお話をしてもらったり。

(知 事)

絵本の講師の方ですか。

(杉 嶋)

はい。お母様方に絵本がどんなに子育てに大切かということをお話して下さったり、また、先ほども申し上げましたけれども、本当に絵本が子どもたちの言葉と心を育てて、親子の絆をはぐくむものであって、子どもの成長の根っこを築く大切な役割を持っているということ、そういうことのお話をさせていただいております。

また、音楽会をやったり、クリスマスとか、お楽しみ会をするのですが、そのときには私どもが人形劇をつくりまして上演したりいたします。子どもたちやお母様方がたくさん来て、本当に子育てに絵本が大事だよということが分かってもらえたらいいなと思っております。

そして、また、子どもをテレビづけにしないで、ちゃんと手を添えて育ててほしいということ。それが大切だということも分かってもらえたらと思っているのです。

子どもたちが育っていく中で、本当に想像力とか、自分が考えて表現する。そういうこともみんな言葉で行っていることで、言葉がしっかり育っていなければいけないということ、やはり絵本がその助けになっているということです。

いつもの土曜日以外に、そういう活動があります。また、お母様方のため、そして、スタッフのために絵本講座の絵本の窓というのを開いておりまして、まついただきさんの本をテキストに勉強会も始めました。

今、一番の問題は、毎年予算をどうするかということです。無料でやっていますので、そこを考えたところを考えると、市民の協力を得ながらやっているというのが現状です。スタッフももっとたくさんの方々が、特に若い方がスタッフになってくれたら、実際に子どもを持ったお母さん方が入ってくださると、いろいろな新しい子どもに即した知恵をいただけますので、とてもありがたいと思っております。

できるだけ子育て支援、そしてまた子どもたちのよりよい人間形成の助けになるような働きをこれからも続けていこうと思っております。以上です。

(知 事)

ありがとうございます。ちなみに、傍聴の方にはあいいく館の資料というのは、渡っているのですか。渡っていない。私はさっき見学させていただいたので、どういうところか分かるのですけれども、もともと幼稚園で、おやめになった幼稚園を借りて、本とかおもちゃをそろえて、ボランティアの方が本の読み聞かせだとか、あるいは、お母さん方が集まって子どもたちがおもちゃを使って遊べるというような場所を運営されているということです。それがあいいく館ということでありましてけれども、杉嶋さんがこのあいいく館を始められるようになったきっかけというのは、何だったのでしょうか。

(杉 嶋)

古くなるのですけれども、1970年に私どもは東京から大竹に参りました。そして、19年間、来た年から杉の子文庫、杉の子児童合唱団という、子どもたちのための働きを始めました。というのも、実はうちは教会でして、子どもたちが集まってきたときに、私の持っていた絵本をみんなが読みたい、読みたいと言って、それならということで、必読図書を200冊ほど買いまして開きましたところ、1日に100人ぐらい来るのです。中学校の真ん前で、隣が小学校だったものですから、本当に子どもたちのニーズがあるということが分かったのです。そして、お母様方も本当に協力してくださって、またそのときは図書館が閉架式で、子どもの本が1冊しかなかったのです。それも6年生ぐらいが読む本1冊しなくて、そんな状況でしたし、小学校も貸し出しがなかったのです。それなので、子どもたちが来る。そんなニーズに押されて杉の子文庫ができ、そして、市内にたくさんの文庫が七つ、八つできまして、大竹市子どもの読書連絡会というのもできました。

そのようなことで、図書館ができるように、子どもたちの閲覧室のある、読み聞かせのできる図書館をつくってくださいと陳情しまして、採択され、これができたのです。

(知 事)

この場所。

(杉 嶋)

そうです。そのできた年に私は北海道に移ってしまっただけですけども、その後、メンバーがここでやはり読書会をずっと続けておりました。北海道でも、九州でも文庫をつくって置いてきたのですが、夫が退職するということになって、やっぱり大竹がなつかしいと戻ってきましたら、次の月にもうあいにく館を始めるようになったのです。そして、古い方々も、新しい方々も一緒になって、また連絡会の新しいグループの人たちも手伝ってくださったりで、そんなことであいにく館はスタートしたのです。

(知 事)

長年ずっと携わっておられた流れの中でということ。

(杉 嶋)

そうなのです。ですから、大竹に来て始めてから今年で 40 年になります。

(知 事)

長い間御苦勞様です。池田さんのお話とも通じるような感じがするのですけれども、このあいにく館も皆さんが手伝っていらっしゃるんですね。これが、潤沢なお金とか補助とかがあるというのではなくて、皆さんがどうしたらいいかと考えられること自体がその活動の輪を広げていっているような印象を私は受けるのですけれども、どうでしょうか。

(杉 嶋)

そうですね。本当にないところをどうしようかとみんなで相談して、一つ一つ積み上げていくから、みんなの力も結集されるし、気持ちも一つになって、工夫してやっていくのです。いろいろ考えながら、ここはどうしようかとやっているような具合です。

(知 事)

そうやって、かかわる皆さんが人ごとじゃなくて、全部自分がやらなければ動かないとか、そういうふうになっていくのがすばらしいなという感じがいたします。大竹というのはそういう活動が多いところなのですかね。すばらしいと思います。ありがとうございます

います。

それでは、中本さん、お願いします。

(中本 (一))

今朝ほどはありがとうございました。私は松ヶ原振興協議会の会長をしております中本です。この振興協議会は何でつくったかといいますと、だんだん耕作放棄地が増えていきまして、2年半ぐらい前、草刈りからぼやが生まれて、それではいけないというので立ち上がったのが振興協議会です。

それにあわせて、その3ヵ月後ぐらいに、みんなでどうしたら元気になるかということを考えて、皆さんがつくっている野菜を何とかしようじゃないかというので始めたのが「わくわくファーム」です。もう2年になりますけれども、今それも何とかやりくりしながら頑張っております。

2年前に小学校がなくなりまして、まちの核がなくなったのです。でも、幸いなことに子供館という施設がありまして、そこに小さい子どもさんがたくさんいらっやっています。その子どもさんと一緒に田植えや稲刈り等をしようということで、今年も幼稚園、小学生と一緒にどろんこになって田植えをしました。また、秋にはその方々と一緒に稲刈りもしてみたいということで、そういう子どもとの交流を通じて、健全育成といいますか、一緒にどろんこになって遊んだなという気持ちを子どもと一緒に味わっていきたいと、そんな感じで頑張っております。

(知 事)

もともと皆さんはお野菜とかをつくられていた方が多いのですか。家庭菜園的にやられていたのですか。

(中本 (一))

そうです。どこか、農協なら農協で種を1袋買いますけれども、その種を一応全部まきます。そうすると、食べきれないのです。で、どなたかに持って帰ってもらうとか、いろいろなことをしましたけれども、そうすれば、それでもう終わってしまうのです。年をとった方も、おじいさん、おばあさんもやっぱり一生懸命そうやって野菜をつくっていますので、その方たちが前向きになるのはどうだろうかと言ったら、やっぱりその野菜がたとえ100円で売れても、すごく前向きになるのです。だから、それは医者へ行くよりも、まず野菜をつくって小遣いを得ようと。それが積もり積もって、現在2年たっても水曜と土曜はちゃんと朝早く起きて、その朝に収穫して、出荷していただきます。

(知 事)

目標ができた感じですか。

(中本 (一))

そうなのです。商売は全くの素人でしたので、初めは戸惑いましたけれども、今はもういろいろなところに行って、値段も見て来、出荷の仕方も皆さんが勉強して、かなりな程度にはなったと思います。まだまだ、イズミさんとか、いろいろなところのお店には比較することはできませんけれども、私たちなりにはかなりよくなったと思います。

一番の売りは、野菜を植えるときに少し農薬はします。だけど、それ以降は一切農薬は使いませんので、畑で獲ってすぐ食べても大丈夫というのが。

(知 事)

それをあまり大きくうたってなかったですよ。

(中本 (一))

それは、完全無農薬なら堂々としてますけれども。

(知 事)

でも、減農薬でも結構いいのではないですか。

(中本 (一))

そうですね。それが田舎の奥ゆかしいところです。

(知 事)

私もお話を聞いて、最初だけの減農薬でと言うと、もっと買いたい人がいっぱい出てくるのではないかと思ったのです。でも、ほとんど売れていましたけれどもね。

(中本 (一))

そうですね。今朝も結構品はあったのですけれども、来られたときにはもうほとんどなくなったような状態で、実際の品物を全部見てもらえなかったのが残念なのですが。

(知 事)

農家の方ということではなくて、一般の方が御自分のお庭とか畑でつくられたのをこういうふうにしたわけですよ。

(中本 (一))

そうです。あと農家の人と。

(知 事)

農家の方も一緒に。

(中本 (一))

農家も一緒におります。

今からの希望としましては、そうしてどんどん若い方たちが一緒に野菜をつくって、仲良く暮らせたらというのが希望です。

(知 事)

今はお年寄りの方が多い。

(中本 (一))

そうです。

(知 事)

40人ぐらい御参加されているとか。

(中本 (一))

はい。会員が40名おられます。その半数はやっぱり後期まではいきませんが、後期高齢者になるような、高齢者の範囲です。その方たちが野菜をつくっています。

(知 事)

毎週水曜日と土曜日には皆さん出荷して、それだけお小遣いが入ってくる。

(中本 (一))

そうです。冬は雪も積もりますし、雨が降っても、かっぱを着て出てきてこられますので、大変ありがたいと思います。

(知 事)

張り合いも出てきますね。どうもありがとうございます。

岩脇さんと上田さん、お願いします。

(岩 脇)

大竹高校 2 年の岩脇苑子です。谷和神楽団に所属しています。私が谷和神楽団に入ったきっかけは、部活の先輩に誘われ、見に行ったのが最初です。何度か見学しているうちに、とてもかっこいいと思い、自分もやってみたいと思いました。

今は舞子頭の指導のもと、舞の練習をしています。今は舞の順番を覚えるので精一杯なので、今年の秋までにはその役になりきって舞えるように週 2 回の練習に励んでいきたいです。

(知 事)

もうどれぐらいやっているのですか。

(岩 脇)

去年の 8 月からです。

(知 事)

では 1 年ぐらい。

(岩 脇)

はい。

(知 事)

なかなか覚えるのは大変なものですか。

(岩 脇)

大変です。せりふもあるので。

(知 事)

せりふもあるのでですか。

(岩 脇)

はい。役によってせりふがあります。

(知 事)

なるほど。では、せりふをもらえる役が多いんだね。

(岩 脇)

今は人倫の新役をしています。

(知 事)

そうですか。ありがとうございます。途中だったかな。

(岩 脇)

活動していて思ったこと、気付いたことは、思った以上に衣装が重く、動きも激しいため、体力をつけようと頑張っています。体がかたいので、柔軟をしています。舞っている方が男性ばかりなので、動作を大きくするように心がけています。

(知 事)

ありがとうございます。確かにそうですよね。男ばかりだと、同じ動作だと小さく見えてしまうのですかね。

(岩 脇)

はい。すごく小さく見えるそうです。

(知 事)

神楽は、女性の役というのがあるわけではないのですか。

(岩 脇)

姫役があるのですけれども、結構激しいので、男性がすることが多いです。

(知 事)

そうなのですか。なるほど。分かりました。ありがとうございます。
では、上田さん、お願いします。

(上 田)

大竹高校2年生の上田美幸といいます。私も去年の8月に部活の先輩に誘われて、谷和神楽団に入団しました。谷和というのは、大竹市内から西に17kmぐらい。

(知 事)

ちょっと遠いですよね。

(上 田)

結構時間がかかります。上がっていったところにある人口が 25 人の小さな集落です。
谷和神楽団は、明治初期ごろから神楽が舞われ、約 130 年の伝統があるとされています。

(知 事)

そんなに古いのですか。

(上 田)

谷和神楽団では、水曜日と土曜日の週 2 回、夜 8 時から 10 時まで練習をしています。
私は、主に笛とかの楽器をやっているのですけれども、難しくて、ビデオで見たり、競演大会を見に行ったりしたときのほかの神楽団の人みたいにうまくできないのですけれども、神楽団で練習がないときは、家でDVDとかを観て練習をしています。今年の秋には一人で笛が吹けるように練習を頑張っていきたいと思います。

(知 事)

やっぱり 1 年ぐらいやっているのですか。

(上 田)

はい。

(知 事)

笛は横笛。

(上 田)

横笛です。

(知 事)

お二人とも一緒のころに入った。部活の先輩というのも同じ先輩なのですか。

(岩 脇)

はい。

(知 事)

何の部活なのですか。

(上 田)

弓道部です。

(知 事)

その部活の先輩も神楽団でやっているのですか。

(上 田)

はい。同じ神楽団です。

(知 事)

でも、ちょっと遠いから大変だよな。

(上 田)

乗せていってもらっています。

(知 事)

車で。お父さんか、お母さんか。

(上 田)

いや、同じ神楽団の人に。

(知 事)

では、谷和の人だけじゃなくて、大竹のいろいろなところから皆さん入っていらっしゃるのですか。

(上 田)

はい。

(知 事)

大人に混じってやるわけでしょう。どうですか。やっていて、いいなと思うことは、どういうことを感じるがありますか。お二人に、上田さんから。

(上 田)

やっていていいことは、昔から、小さいころから神楽が好きだったので、やれるのがう

れしいです。いろいろな神楽団の人とか、舞に行ったところの地域の人たちと仲良くなれるのがいいと思います。

(知 事)

岩脇さんはどうですか。

(岩 脇)

おじいちゃんが胡子舞というのをしていたので、昔から私も見ていたから、入って自分がしてみたら、意外と大変さを知ったのですけれども、やっぱり楽しいからいいなど。

(知 事)

弓道部は続けているのですか。

(岩 脇)

はい。

(知 事)

では両方で大変ですね。毎日忙しい。勉強する時間は大丈夫。でも、好きなことをやっていることが一番だからね。勉強も大事だけど、そうやって打ち込めるものがあっていいですよ。

お二人とも神楽に小さいころからなじみがあったということなのですね。

(岩 脇)

はい。

(知 事)

大竹ではそういうふうに盛んなのですか。それとも、お二人がたまたま。割と盛んなの。身近に神楽があった。

(岩 脇)

はい。

(知 事)

そうなのですか。僕は五日市に住んでいたのですけれども、五日市に神楽はないと思うので、どちらかというと県北のイメージだったのですけれども、そうですか。ありがとう

ございました。頑張ってください。

それでは、洲上さん、お願いいたします。

(洲 上)

私は、大竹の玖波というところでカキの養殖業をしています。玖波漁業生産組合の洲上といます。私どもが今やっているのが、カキをいかに全国的に売るかということ。当然広島の名産ですけれども、今、取り組んでいるのは、大竹の特産品グループをお願いをして、今、唯一カキの「きたひ」と言いますが、カキの干しカキというものに取り組んでやっています。池田さんにも御協力していただいて、最初はどのようなふうにするか、いろいろと試行錯誤しまして取り組んできたのですけれども、ここ数年なんとか成功しまして、ラジオとかテレビなどが取材にきたりもしまして、今、行っているところです。

ただ、やるにしても、なかなかカキという自然が相手に、皆さんが簡単に思うようにできないですから、その辺が一番苦労するところです。

干しカキ自身は、知事は見られたことはありますか。

(知 事)

干しカキというのは、果物のほうでよく見ますけど。

(洲 上)

ここに写真があるのですけれども。

(知 事)

ああ、カラーだと分かりますね。白黒でいただいたら、本当に別の干しカキとそっくりで。

(洲 上)

そうですね。実際に山の干し柿と同じように干しますので。

(知 事)

このカキはかなり大きいですね。

(洲 上)

いや、それはまだ干したままですから、実際に自然乾燥で4~5日、そうすると大分縮んできます。カキ自身、90%が水分みたいなものですから、ですから、前に知事がどこかでカキの一番おいしいのは2月、3月の水温が下がった時期とおっしゃったことがあった

ですね。

(知 事)

そうですね。3月、だから産卵の直前がおいしいと。

(洲 上)

それを私たちいつも水産の人にも言っているのです。よくお客さんが3月はカキの時期が過ぎているのではないとか言われるのですが、例えばお風呂に入るとき、お風呂が沸いたなと思っても、下はまだ変わっていない、混ぜないといけない。でも、海の水はそんなもんじゃないのですよと、お客さんによくそういう説明をするのです。だから、雪水が解けて、大体2月から3月が一番おいしい時期ですよ。特に干しカキは身がかたくならなないと、本当に串に刺すものですから、普通に刺すと落ちてしまうのです。だから、どうしても3月ごろしかできない品物になってくるのですけれども、こういう形で、大竹にもこういういろいろなものがありますよということを全国的にPRしていきたいと思っています。

(知 事)

もともとこのカキを干すというのがあったわけではないということですか。

(洲 上)

いや、もともとは、大昔、縄文時代のころから自然に干して、昔の乾パンじゃないですけども、干して食べていたというのがあるのですけれども、この辺は池田さんが詳しいと思うのです。

(知 事)

でも、最近つくり始められたということですか。

(洲 上)

そうですね。もう10年ぐらいにはなりますけれども。

(知 事)

昔から伝統で続いていたというものではないということなのですか。

(洲 上)

この辺ではもともとやっていなかったですね。そういう古文書的なものを調べていただ

いて、特に先ほど申し上げた特産品グループで、今の大竹の何か特産品はないだろうかということで、私どもも一緒に参加させていただき、こういうものにたどり着いたという形です。

(知 事)

なるほど。カキももちろん生食とかレストラン用に出荷するものが多いと思うのですが、けれども、いろいろな付加価値で売れるようになると、もっともっといいなというのは思いますよね。

(洲 上)

そうですね。特に知事には申し訳ないですけども、広島県で有名なのは地御前ですけども、ただ、カキ自身はこの大竹が、御存じのように一番西ですから、波の出入りも一番いいですし、カキ自身が一番いいものができますから、そこをもっとアピールしていきたいと思うのです。

(知 事)

皆さんそうおっしゃるものですから、私も悩みが深くてですね。でも、最近、またカキは、いろいろなところでいろいろな取り組みをされていますよね。干しカキもそうですね。

(洲 上)

本当の生を干しているのはここしかないです。皆さん、大体ボイルされて、それから真空で味付けをされる。これは、何も味付けせずに、そのまま焼いて食べれますので。

(知 事)

この間、江田島に行ったときに、いわゆるいりこをつくるときの乾燥機で乾燥させた乾燥カキがありました。あれは干しカキというのか何と言うのか分かりませんが、これは天日なのですよ。

(洲 上)

そうです。自然の天日干しです。

(知 事)

向こうの乾燥カキは中国に輸出されているとおっしゃっていましたがけれどもね。これは、今は国内販売。

(洲 上)

国内というか、ほんの気持ちだけですけれども。

(知 事)

でも、お酒のつまみにはおいしそうですね。

(洲 上)

量はどうしても自然乾燥ですから、日にちもかかりますし、大量生産ができないもの
ですから、ごく一部に販売という形でさせていただいております。

(知 事)

では、なかなか手に入らないレアものということですね。

(洲 上)

そうですね。

(知 事)

では来年は是非食べさせてください。

(洲 上)

はい。毎年テレビ局の方が来られ、私どもも本当はそれは遠慮させていただきたいので
すが、旬のものという形で、中国新聞さんも掲載してほしいということで、だから、3月
になると、大竹の中で、ほかのカキ屋さんと一緒に協力させていただいて、ああいう簾の形
で干していき、3月の風物詩ではないですけれども、その辺をもっと皆さんに協力してい
ただければできるのではないかと思います。

(知 事)

そうですね。それはまた組合のほうで。

(洲 上)

漁業組合の方と一緒にタイアップしてですね。今は私どもだけですから。

(知 事)

それは是非広めていただいて。

(洲 上)

はい。お願いします。

(知 事)

ありがとうございます。

それでは、中本さん、今日は中本さんはお二人いらっしゃるの、中本伊勢雄さん、お願いいたします。

(中本 (伊))

私は、大竹市防鹿から来ました大竹手すき和紙保存会の会長の中本伊勢雄と申します。

この会ができたのが、24年前、今は亡くなりましたが、県の無形文化財保持者の大村調一さんという方が、高齢のため、自分ですけなくなったということで、私も含めて当時の地元の有志が60名ばかり集まって結成しました。大村調一さんは、それから5年後に亡くなりました。すき手さんは、昔から割と防鹿には多かったですから、経験している人が教えたりして伝承していたのですが、そのすき手さんも高齢になって、10年ぐらい前に、もう私もすけないので何とかならないだろうかということで、大竹市のほうにお願いし、募集してもらって、今、広島の人と大竹の人で、2名が交互にすいているような状態です。

(知 事)

お二人だけですか。

(中本 (伊))

二人だけなのです。やっぱり重労働なのと、かなりの年期を積まなければいい紙にならないのと、技術が要るものですから、2名だけで現在やっているのです。44歳の男性サラリーマンの方と、60歳の介護士さんです。これが冬場の仕事なのです。夏場はとろろ葵といって、1枚、1枚すいて重ねていくのに、上と下がくっつかないようにするとろろ葵という、植物の根っこなのですが、これをたたいて、砕いて、水に戻して、そのねば一っとしたものを使うと、上下はぐとときにきれいにはがれるのです。そのまますいてしまうと、団子みたいになって紙になりません。それが夏場は全然効かないのです。

(知 事)

温度が高いとだめなのですね。

(中本 (伊))

23 度以上になるとだめなのです。

(知 事)

紙は冬にしかできないものなのですか。

(中本 (伊))

そうなのです。6 月から 9 月まで休業みたいな格好になるのです。ただ、夏休みに入りましたので、体験者は、はがきの体験とか証書の体験とか、細かいことは、しません。原料はいつも用意していますので、1 週間前くらいに申し込んでいただければいつでもできます。今日も 5 名ばかり小学生の低学年の人が体験に来るといっていたのですが、近所で葬式があり、私を含めて対応できなくなったので、キャンセルという形になりました。

今後の予定なのですけれども、8 月 4 日にも小学生 15 名、それから 11 日水曜日、これも 15 名、今のところこの 30 名が体験に来るようになっています。年間を通してはだいたい 150~200 人近くの体験者になります。

去年は、東京のほうから大型バス 3 台で、宮島、広島を観光した後に、この大竹の手すき和紙の体験をしたいという申込があったのですけれども、施設のほうがとても 100 名以上も受け入れることができませんし、休憩所もありませんので、お断りしたのです。

(知 事)

残念ですね。

(中本 (伊))

ええ。今、お渡ししました版画の先生 君島さんという人が、栃木県の人なのですけれども、佐伯区のほうへ永住されまして、大竹にこんな紙があるのだったら一度刷ってみたいということで、10 日ばかり前に来所され、すりあげたものが今、持参しているものです。大きな紙で、あそこにあるのが 600×900、うちのかせですくのはその紙が定着になっていますが、それでは小さいと。この 3 倍、畳 1 枚分、900×1800、それくらいの紙 1 枚ですけないかということをおっしゃいました。今度、広島の原爆をテーマにしたものをつくるということで、それをすくのだったら、作業場を全部大改造しないといけませんので、結局それもキャンセルしました。多分四国の伊予のほうで 1m×2m というかせがあるそうですから、そこへ注文されるのではないかと思います。こういったようなことで、すき手さんに時間給として 1 時間 600 円ですいてもらっているのです。すいたときだけそれを払っているのですが、その需要がないものですから、すいた紙が売れない。昔は神楽の面をするのに、北広島町のほうから大量に注文があったのですが、その人も面をつくらなくなった

し、大竹の大石さんが絵の手書きをやっていますけれども、その人も後継者がいないようなことを言っていましたので、その1代で終わるのではないかと。平均年齢が75歳。おじいちゃんのクラブみたいなもので、すい子のほうは44歳ですから、あと20～30年は頑張ってもらえると思うのですが、コウゾの栽培は、私がほとんどやっていますが、私も67歳ですから、あと10年したら77歳です。その10年もできるかどうか分かりませんし、そういうことも含めてものすごく苦しいのです。私も会長を受けたくなかったのですけれども、やる人がいないものですから、今まで頑張ってきたのです。この辺を行政のほうで、大竹市、県でも、これを何とかしてもらえればと思っています。

(知 事)

これは大竹の、実はさっき商店街で私は便せんとはがきを何枚か買わせていただいて、そしたら、長野でつくった和紙も一緒にいただきまして、大竹のほうがいいから書き比べてくださいと言われて。

(中本 (伊))

紙の質が、全部コウゾですから、絶対質は保証します。障子紙にしても、強度の面では普通の機械和紙に比べたら全然。

(知 事)

そうなのですね。だから、これは全国に自慢できる品質だと。

(中本 (伊))

今のところはそう思っているのですが、分かりませんが、自分たちはそのつもりでやっています。

(知 事)

これは、400年前から始まったということですがけれども、大竹の伝統としてあったわけですよ。

(中本 (伊))

そうなのです。江戸時代の初期からずっと続いていたらしいのです。私の地区は、今は50軒たらずですけれども、昔はほぼ、7割ぐらいの家で紙をすいていたらしいのです。私も詳しくはよく分かりませんが、三菱レイヨンができたり、会社ができたら、紙すきのほうが廃業という形をとり、大村調一さんだけが残ってずっと続けていたのですが、その人も高齢になって保存会というのが一応24年前にできた。

(知 事)

それで、何とか今お二人で、すける技術はそこで継承されている。

(中本 (伊))

はい。今のところはね。一応二人の人もかなりすくようになりましたので。

問題は、コウゾをつくるのが、過酷で、夏場、私もほとんどコウゾについているような状況。

(知 事)

木ですよ。

(中本 (伊))

木です。木の皮が原料ですから、その木をつくるのに、枝が出ますよね。枝を出さないようにしないといけない。たけのこみたいに。

(知 事)

では、どんどん切っていくといけない。

(中本 (伊))

切ったらいけないのです。これが難しいのです。枝が出るために芽がこれぐらい出ます。それを爪先で幹を傷めないように取ってやらないといけない。

(知 事)

とるのですか。

(中本 (伊))

芽です。1本の木から芽が出ます。芽が出るところを取る。これが今は仕事です。

それと、カミキリムシが来て、皮を使うのに皮を食べたり、また、今は2mぐらいになっていますけれども、コウゾの先っぽ30cmぐらいは柔らかいですから、イノシシが、春先に倒して先っぽだけ食べるのです。これにまた大被害を受けています。

(知 事)

分かりました。でも、ずっと伝統文化なので、なくなるのはもったいないですね。

(中本 (伊))

そうなのです。今から入ってくる人は、多分コウゾをつくってやろうという人もいないでしょうから、その辺のところを、行政のほうでなんとかしてもらえたらという考えなのです。つくってやろうというような人はいませんか。

(知 事)

誰かがつくっていただかないと。御苦労様です。でも、現状はよく分かりました。でも、もったいないですよ。コウゾをどこか栽培しているところは、日本全国の中には。

(中本 (伊))

コウゾを栽培しているところはないですよ。地方、地方で、各県に1カ所ぐらいはコウゾを使って手すき和紙をやっているのですけれども、それらも自分たちでコウゾを栽培していっぱいいっぱいなところでやっているのです。

(知 事)

そういうことなのですね。

(中本 (伊))

購入しようにもないものですから、自分たちでやるしかないですね。

(知 事)

なるほど。そのセットで考えると。

(中本 (伊))

はい。

(知 事)

分かりました。どうもありがとうございました。本当に御苦労様です。ありがとうございます。

それでは、西さん、お願いいたします。

(西)

私は北栄を拠点にプラントメンテナンスを営んでいる会社をしております。どうぞよろしくお願いいたします。

皆さんと全然違う職種といたしますか、産業でございますので、ちょっと場違いな雰囲気

が大変しておりますが、先ほどサカネテクノさんのほうで現場を見ていただいたと思うので、大体知事もお分かりだと思いますが、ちょっと違う方面からのお話をしていきたいと思います。

県の企業立地ガイド2010、これは県知事もお読みになったことがあると思うのですが。

(知 事)

はい。それは一番新しいのですか。

(西)

はい、そうです。

(知 事)

私の写真が入っているもの。

(西)

そうです。この中で、ほかの地区はブルー系統で、大竹だけがオレンジ系に。

(知 事)

一番左のですね。

(西)

はい、そうです。大竹の産業構造が分かるような気がいたすと思うのですけれども、大竹の場合、人口とこのグラフを見ていただいたら、製品の出荷高、1人当たりの出荷高は県内一ということで、大竹の場合、オンリー1とナンバー1を兼ね備えている。大竹の力かなと思っているわけですが、このオレンジ色の中身というのは、化学とパルプということで、大竹のもともとの産業、化学繊維、パルプ、紙製品となっているのですけれども、これは世界でも最先端の付加価値の高い製品を大竹の工場が生産しているということで、これは余談なのですが、小学生の社会見学で、大竹の工場の中を社会見学しますと、子どもたちが全く興味を示さないのですよ。粉とかペレットとか液体とか、紙の固まりとかいう格好ですから、製品が出てきていないのです。

(知 事)

パイプの中を走っているみたいな。

(西)

そうです。見えても粉状ですから。そういうことで、最終製品になる素材なので、大竹から国内とか輸出をされて、最終的には製品になってまた我々のところに返ってくるのですけれども、これもまた余談ですが、大竹駅の J R 貨物のコンテナの出荷高が中国地方一なのです。(※昭和終わりまで大竹駅の J R 貨物のコンテナ発送量は中国地方一であったが現在は中国地方一ではない)

(知 事)

そうなのですか。

(西)

はい。国内でも 10 位から 15 位内に毎年入っているという状況で、やっぱり出荷量は最高です。海のほうも大竹港が新しく、あこがれみなとができて、国内、海外にも輸出をしている状態です。

この大竹の基盤産業ができたのが、大正 5 年に大倉組山陽製鉄所というところができまして、それから撤退したのですけれども、戦前戦後の誘致活動で、いろいろな企業を誘致されまして、昭和 36 年に日本初の、岩国と一緒になのですが、コンビナートを形成してまいりまして、そのときから午前中見ていただきました機械のメンテナンスの職人が、昔の戦前の軍事工場、そして戦後の大手企業の技能養成学校等を出た優秀な技能者たちが、今の大竹・岩国地区のプラントを支えてきたということですし、午前中にお話をしておりますので、長くなりますからあれなのですけれども、我々の仕事柄、アウトソーシングの中で、技能から技術へというところが今、問題になっておりますし、先ほどもあったように、我々の業界も高齢化が進み、やっぱり技能・技術者がだんだんと引退していく中で、後継者問題、若い人の育成ということを、我々自身が、今、企業同士で一緒になって考えているところでございます。

県内各地に技能伝承とか、技術の教育機関等いろいろありますけれども、大竹から県の西部にかけて、そういう施設が 1 カ所もございません。我々自身も大竹市さんとか、大手企業さんとか、我々の同業者でそういうことをいろいろお願いしているのですが、我々自身も考えております。どうか雇用の促進とか、産業の促進、大竹のこの伝統ある我々の職業というのをどうにか続けていき、大竹の産業を守っていきたいし、我々自身としたら、私どもプラントメンテナンスがあるからこそ、今、大竹のプラントがあるのだという気持ちで頑張っておりますので、どうか御理解いただきたいと思っております。

(知 事)

ありがとうございました。先ほどメンテナンスを実際やられているところも見させてい

ただいて、私は本当に現場でやっているものだと思っていたものですから、機械をああやって全部分解してやられるというのは、それこそエンジンのオーバーホールみたいな、それに近いですね。

(西)

そうですね。実際のところ、ああいう定期修理とかいったら持って帰ってくるのですが、突発的にトラブルが起きると、どうしても現場でやらなくてはいけない。作業しなくてはならないということで、工場をとめるわけにはいかないから徹夜とか、現場での差し向きの復旧とか、そういう面で、工場で作業すれば、ちゃんとした、先ほどビデオを見ていただいたり現場を見ていただいたように、きちんとしたものができるのですが、まず、復旧して動かすというのが先決になりますので、その辺の臨機応変な技能というのがやっぱり経験、これは教育だけでは不可能で、教育を受けた者がしっかりと経験を積んで初めてできるものなのです。

それから、大竹にも今の技能のそういう試験を受けたり、いろいろと各企業頑張っているのですけれども、やっぱりしっかりした技術を教育するところというのが、我々自身で無理なところもありますので。

(知 事)

共同で使えるようなところがということですね。

(西)

そうですね。

(知 事)

先ほどお伺いさせていただきましたけれども、全体としてはメンテナンスの需要が減っているわけではないけれども、景気が悪くて、生産がちょっと落ちているというのは別に、全体としては減っているわけではないけれども、と理解してよろしいですよ。

(西)

はい。全体では減っていません。

(知 事)

ただ、その技能を受け継がれる人がなかなか難しいと。

(西)

そうですね。教えるほうもしっかりとした技術を持っていないといけないというところですから、どうしても、最近我々がやっているのは、機械に頼ってしまう。それも、機械に頼れば、ちゃんとしたそういう数字が出たり、コンピューターを使った数字が出たりするわけですけども、どうしてもそういう基礎というのが要る場合がありますので、実際には仕事量は増えています。アウトソーシングの中で、客先が我々にそれだけのものを要求される。それに応えるのが我々技術者としての仕事だろうと思いますし。

(知 事)

教える時間がないというのが、先ほどもおっしゃっていましたがけれども、それはすごくもったいない感じがしますね。

(西)

そうですね。今、どうしても見て覚えろの世界をやっていますので。

(知 事)

ビデオなども使っていらっしゃいましたが、今、新しい技術もたくさんあるので、ビデオをとって、ビデオに簡単に書き込みができるというのも御存じですか。

(西)

そうですね。ビデオは確かにいいのですが、勉強になるのですが、やっぱり手に触れて、その感覚というのが、実際のところやってみないと分からないというところがございます。

(知 事)

それはそうですね。そういうところをつなげていきたいということですね。

(西)

そうですね。

(知 事)

大竹の一つの産業としてつなげていきたい。

(西)

そうですね。昔は、大竹・岩国地区の職人たちが戦後全国のプラントに、四日市から千葉から、水島からいろいろなところに出向いて行って、向こうに永住している人もたくさん

んいらっしやいます。大竹・岩国地区の職人，そういうプラントメンテナンスをする人たちはいまだに優秀な方がいらっしやいますので，それを引き継いでいきたい。

(知 事)

それを大事にしていきたいということですね。分かりました。ありがとうございます。
それでは，泉さん，お願いいたします。

(泉)

大竹市青少年育成市民会議の副会長の泉と申します。どうぞよろしく申し上げます。

大竹市の青少年育成市民会議という団体は，青少年の健全育成を主としておりますけれども，その中のスローガンに青少年の心に文化の芽を育てようというのがございまして，大竹には江戸中期のころより女の子の厄払いとか，春や幸せを願って流し雛，ひな流しというのが行われていたようでございます。戦争中はちょっと途絶えておりましたのを，戦後，俳句の方たちがそれを復元なさって，たまたまその俳句の末席に私がおりました関係で，37年前にこの青少年育成市民会議が発足しましたと同時に，これを取り上げさせていただきました。

今日，ちょっとそこに実物をお持ちしておりますが，これは私どもが材料をすべて手づくりでまとめたものを，女の子の御家庭にお配りして，お母さんやおばあさんとひな祭りの話などをしながらつくりあげていく工程の中で，親子の触れ合いが深まったりとか，女の子の優しさ，思いやり，そういったものをはぐくみ，やはり情操教育につながっていくのではないかとということで，現在もずっと続けさせていただいております。

最近是全国的な広がりを見せまして，東京，京都をはじめ，奈良とか，生駒，九州，四国と，そういったところからも御参加くださったり，御見学に来られたりと，非常ににぎわいを見せていただいております。

また，青少年だけでなく，福祉関係の方，あるいはいろいろな団体から講習を頼まれております。遠くは北海道から，何か新しい文化をつくりたいということで指導に伺ったこともございますし，最近では，呉の方が何かこういった優しいものをつくってみたい。伝統文化にしてみたいということで，2年ぐらい続けて御見学にお見えになっているようでございます。

それで，伝統文化の継承というのは，皆様方の地域の意識の向上と申しまししょうか，認識の深さが大変必要なのではないかという思いがしております。よそからお見えになった方が，お帰りがけに，今の時代に失われていた大切なものを今日いただいたような気がするよと。とても温かい，楽しい一日でした。ありがとうございますと言ってバスに乗られるのを見ると，私どもも本当にうれしくなっております。

子どもたちが一生懸命手づくりをして，自分たちの願いをかけて，早春の川面に静かに

流すものですから、自然と合掌の姿が見られて、大変美しい、優しい光景でございます。

大竹市の行政のほうは、本当に温かく、いろいろと幅広く見守っていただいておりますので、できれば県のほうでも御理解をいただいて、御認識をいただけたらうれしいなと思っております。以上でございます。

(知 事)

ありがとうございます。これは女の子がメインにつくっていらっしゃる。

(泉)

そうですね。大体ひな祭りと端午の節句と相まって、ひな祭りというのは女の子の大切な節句の一つでございますけれども、最近は男女の別なく、保育所とか、そういったところがこういった材料をいただきたいということで、御一緒につくられるもので、男の子も御参加になっているようでございます。

(知 事)

先ほど地域の皆さんの認識の深さが大事であり必要だというお話でしたけれども、これは地域の人がどういうものか理解をして、そういうことをサポートしていくと、そういう意味ですか。

(泉)

そうですね。私どもは、全部の御家庭に材料はひとまずお配りをするのですけれども、やはり伝統文化に対する意識がどれだけ親御さんにあるか、子どもたちが塾を優先させて、こういったものをつくることに時間をとられないとか、いろいろな御家庭、事情があるようでございますが、これが始まりました当初は、本当にささやかで、今のような全国区になるとは夢にも思っておりませんで、たまたま、こういったものが厄を逃すということで、団体で行うものではございませんけれども、私どもが青少年を対象にするもので、足場が悪かったりとか、そういった危険な関係で行事として扱っておりますので、初めはそんな人数ではございませんでしたけれども、次第に皆さんが、旅の方がおっしゃったように、この美しい、優しさと言いましょか、その光景に触れられるたびに、人数が増えて、御参加いただけているようで大変うれしゅうございます。

(知 事)

これも、今日は幾つか伝統のお話が出てきているのですけれども、大竹の伝統ということで、守っていきたいということですよ。

(泉)

はい。鳥取県にはあるのですけれども、広島県には今、大竹市だけではないかというふうに思っております。

(知 事)

ありがとうございます。

それでは、木村さん、お願いいたします。

(木 村)

木野両国夏祭り実行委員長の木村と申します。毎年7月最後の土曜日に、尻相撲大会をメインに。

(知 事)

尻相撲。

(木 村)

はい。そこにポスターがあるのですけれども、たまたま来週の土曜日に開催いたします。

今年が8回目なのですけれども、そもそも始まったきっかけというのが、小学校の統廃合の問題が持ち上がりまして、地域も何か活性化しなければいけないということで、地域全体で何をしたらいいかという取り組みを考えました。ただ単に盆踊りにしようかということからいろいろ考えたのですけれども、それではおもしろくないということで、地域のある人が山口県の三田尻町まで行きまして、そこには女尻相撲というのがあります。そこを参考に、女の人だけじゃなく、みんなが参加できる祭りにしたいということで、幼児から大人まで、いろいろな人が参加できるおもしろい祭りにしたいと思って始めました。

今日、実はプログラムができあがりまして、急遽、今日つくりまして、こういう形で、出席者とか全部、ほとんど出ているのですけれども、幼児の部、子尻の部、女尻の部。

(知 事)

こういう表になっているのですが、幼児の部はいいのですが、子尻、女尻(めじり)、男尻(おじり)、そういう感じで、しかも、横綱を決めるのは、女尻と男尻で闘うのですか。

(木 村)

本当はしたいのだけれども、まだしたことはありません。

(知 事)

そうなのですか。それぞれが横綱になるということですね。男尻の横綱，女尻の横綱と。

(木 村)

そうです。本当はそれをひっつけてしたいのですけれども，なかなか。

(知 事)

私はてっきりここでつながっているから，そうするのかなと思いました。そうですよね。

(木 村)

地域全体での祭りということで，いろいろな屋台を出しておりますて，地域の大人，1丁目，2丁目の自治会，消防団，神楽団，いろいろな団体がそれぞれ屋台を計らいまして，その売上げでもって運営をしております。

だから，商品も豪華にして，いろいろなところから，いろいろな人に来てもらえればと思っております。そこの一番下に抽選番号が書いてありますが，それは1番になっております。

(知 事)

これは私がいただけるのですか。

(木 村)

はい。そこに協賛いただいた方々の御寄附と売上げでもって運営しております。

(知 事)

盛り上がりそうですよね。

(木 村)

今年で8回目になるのですけれども，毎年いろいろなところから，最近はこちらからお願ひしなくても，人が集まるようにはなっておりますが，残念なことに，来年，木野小学校がついになくなってしまいます。ですが，一応地域の皆さんがまとまりがすごくできたことに対しては，すごくいいかなというふうに感じています。

(知 事)

でも，これは小学校がなくなっても続けられる御予定なのですか。

(木 村)

尻相撲も残したいのですけれども、PTAとか小学校とかもかなり力がかかっていますので、その人員がかなり来年は不足するので、今からどうしたらいいかというのを、今年が終わってから考えなければいけない問題がかなりあると思います。

(知 事)

私が勝手に言っては大変申し訳ないのですけれども、地域の中に根付いていらっしゃるので、こういう活動は是非継続していただきたいですよ。

(木 村)

いろいろな面で、もしやるとすれば、スタッフの募集も今からかけていかないと、木野地域だけではなくて、いろいろなところからボランティアさんを募集すれば、何とかできるのではないかと思うのですけれども。

(知 事)

今日今まで幾つか出ている話ですけれども、そうやって頼らなければいけない人が増えれば増えるほど、逆に活動が広がるかもしれないですよ。

(木 村)

そうですね。なるべく残したいとは思いますが、今年はかなり盛り上げたいと思いますので、よければ見に来てください。

(知 事)

ありがとうございます。

それでは、湊さん、お待たせしました。よろしく申し上げます。

(湊)

広島県にはたくさん島があるのですけれども、大竹市も四つ島を持っています。その四つの中で、一つだけ人が住んでいる大きな島からやって参りました湊といいます。阿多田島と言います。

私は、阿多田島 100 人程度の組合員・準組合員がいる漁協の理事もやっています。組合長は、さっき池田さんの団体にマークされそうな風貌の大竹の県議の大井が組合長です。

長年、50 年以上も海浜清掃を行っておりまして、天皇陛下がまだ皇太子の時代に島にも来てもらって、去年はその功績を認められて勲章までいただきました。

私自身は、魚の稚魚づくりをずっと 30 年以上やってまいりまして、ヒラメとか。

(知 事)

稚魚づくり。放流する稚魚ですか。

(湊)

いや、養殖用が多いのですけれども、放流も多少あります。30年以上やってまいりまして、最近なかなか稚魚も売れなくなって、魚価も低迷して、もう来年からはやめようということになったのですが。

(知 事)

そうですか。県の事業が競合していないですか。

(湊)

多少あるとは思いますが、今まで県の水産試験場とかいろいろな援助を受けまして、かつては日本で先進県だった広島の養殖ですが、今はかなり下のレベルになってしまって、私も稚魚づくりでは日本全国、北は青森とか、沖縄とか、西は韓国、東はハワイまで稚魚が行ったことがあります。

(知 事)

そうですか。国際的にね。

(湊)

大竹の小学生の方にも社会見学でいろいろ来てもらって、見てもらったのですが、それが続けられなくなって寂しい思いをしているのですけれども。

(知 事)

それは広島だけじゃなくて、全国的に需要が。

(湊)

そうです。日本人の魚の消費量というのが最盛期の半分ぐらいになっていまして、なかなか、それから外国からもどんどん魚が入ってきて。

(知 事)

そうですね。南洋系の聞いたこともないような魚がね。

(湊)

そうです。回転寿司なんかほとんど外国産の魚ですね。農家の方の米づくりはかなり関税で保護されているのですけれども、漁師は関税がないですから、ほとんどないと同じです。外国からやりたい放題にいじめられているという感じですね。もう少し何か考えてほしいなと思うところがあります。

島も、かつては大規模養殖の、広島県唯一の大規模な養殖場で養殖魚を県民の皆さんに供給してきたのですけれども、魚価の低迷とか、売れなくなったというので、だんだん衰退してきているところです。新しい産業を興そうと思っていろいろ努力はしているのですけれども、なかなか難しいですね。

(知 事)

その中で、海浜清掃はもうずっと。

(湊)

そうですね。今年も、明日やる予定になっております。

(知 事)

今ちょっと例の大雨の影響で、いろいろごみが多くなっていないですか。

(湊)

そうですね。たまにどうしようもなく流れてくるときがあるのですけれども、何とかきれいな島にしていこうと。それから、島一周の道路が崖崩れで寸断されていて、何とか早く通れるようにしていただきたい。

(知 事)

それは県道ですか、市道ですか。

(湊)

市道だと思います。

(知 事)

では是非市長さんに。各市なるべく早い復旧で頑張っているのですけれども、なにせ箇所が多いものですから。

(湊)

何とか水産業のほうにも県で力を入れてもらって、試験場あたりももう少し、かつての繁栄を再現できるようにしてもらいたいと思っています。

(知 事)

そうですね。あれは竹原でしたっけ、竹原のセンターですよ。

(湊)

いや、今は音戸にある、試験場とはまた別の。

(知 事)

音戸。音戸のほうと一緒にやっていたら。

(湊)

音戸と、いろいろな技術指導とか、いろいろな指導を受けてやっています。

(知 事)

竹原で大分稚魚をつくっているものですか。

(湊)

竹原は放流用だから、養殖用とはまたちょっと違うのです。

(知 事)

それはやっぱり違うものなのですか。

(湊)

多少は違います。競合するところもあります。

(知 事)

民業を圧迫していたら申し訳ないなと思ひまして。

(湊)

私からは何とも言えませんが。

(知 事)

分かりました。ありがとうございます。

自由討論

(知 事)

皆様、ありがとうございました。ちょうど、今日もまた珍しく時間ぴったりで最初のセッションが終わったのですけれども、大抵すごく長引くのですけれども、素晴らしい皆様の時間配分で、御協力ありがとうございました。

これから全員でのディスカッションに移りたいのですけれども、幾つか私から質問をさせていただきたいと思います。その後で、もし御質問があったらという感じで進めようと思います。

大竹市は、合併されていないですね。県内 80 幾つあった市町が 23 になるまでずっと合併が進んだのですけれども、周りで、廿日市とかもそうですし、五日市は広島市に大分前に合併しましたが、山県郡のほうは大体二つの町になって、合併について何か考えられたことは、あまり大竹の中ではトピックになっていないですか。中本さん、お願いします。

(中本 (一))

松ヶ原は地域性があると思うのですけれども、大竹市の飛び地ということで。

(知 事)

一回廿日市に入って。

(中本 (一))

そうなのです。だから、行政さんも、それから住民の自治会も、廿日市、大竹ということはないに、みんなで仲良くやっていますけれども、やっぱりいろいろな面で不都合はあると思います。だから、大竹市になるにせよ、廿日市市になるにせよ、松ヶ原の場合は一つになったほうが、合併したほうがいいのかなど。

(知 事)

それは廿日市と、ということですか。

(中本 (一))

それはどちらでも構いません。松ヶ原に廿日市市大野町何番地と大竹市松ヶ原町何番地という、同じ地区に二つの町村がありますので、ちょっといろいろな面で不都合は感じて

います。そういう面から言ったら、どちらにでも一つのまちになったほうがいいのかなどは感じています。

(知 事)

なるほど。今、県内各地で合併して、もちろんいい面、悪い面というのがあって、いろいろお伺いしているのですが、されていないところが少なくなってきているのです。されたところの御意見はいろいろ聞いているのですけれども、していないところの御意見も聞いてみたいなどと思って、今日ちょっと振らせていただいたのです。非常に微妙な質問なので、お答えにくいところもあるかもしれませんが、ほかにどなたか、西さん。

(西)

大変難しい質問だと思います。我々大竹市民は、まず合併をしていないですから、した苦勞というのが分からない。まず一番に言えるのは、大竹市から、今の法務局とか、職安は出張所が一応ありますけれども、そういう県の施設がみな廿日市へかわっていったという部分の苦勞は確かにあると思います。

でも、大竹市の場合、小さいながらそれなりの市で、人口3万になっていますけれども、広島まで車で40分、電車でも駅まで四十数分ということで、野球を見に行くのも、サッカーを見に行くのも、コンサートを聴きに行くのも、距離的には問題ないまちだろうと私は思っております。

私は竹原の友達がいるのですが、竹原も合併はしていませんよね。昔、冗談で、大竹原市というのはどうだろうかという話が、竹つながりで。

(知 事)

海でつながっていますね。

(西)

という冗談が出たのですけれども、竹原と大竹とは全く違うと思うのですけれども、やっぱり私は今の大竹のままのほうがいいのかなどという気はしております。

(知 事)

ありがとうございます。大竹は、そうは言っても、いろいろなものがそろっていますよね。人口規模の割にはですね。

(西)

そうですね。そろっております。やっぱり岩国とのつながりが、また近いですし、今度

飛行場等もできれば、我々は飛行機で岩国からということにもなりますよね、今度は。

(知 事)

事実上そうですね。県としては是非本郷の飛行場を御使用くださいと言いたいところなのですけれども。

(西)

最近、東京に出張に行くのに、最初は新幹線、その後飛行機にかえて、最近また新幹線にかえたのです。お酒が飲めないというのがよく分かりまして、やっぱり遠いですよね。

(知 事)

広島空港はそうですね。特にここからは一番遠いところですね。

(西)

岩国の飛行場が、時間ですよ、朝早く出て、夜帰る便があればまた別でしょうけれども、中途半端な時間帯になると、使いようがない状態になってくるかも分かりません。知事に対して大変失礼な言い方かも知れないですが。

(知 事)

いやいや、そんなことはないですよ。

(西)

ですから、岩国とのつながりというのは、大竹には切っても切り離せないものがある。

(知 事)

経済的、社会的にやっぱり岩国との関係が深いということですかね。

(西)

そうですね。

(知 事)

ありがとうございます。ほかにどなたかいらっしゃいますか。よろしいですか。

すみません。いきなり微妙な質問を振ってしまいましたけれども、この大竹のまちの歴史というのは、先ほどの和紙の話でいうと随分古いものがあるわけですが、大きく発展したのは、この工場がたくさんできて以来だったとか、あるいは戦後、引き揚げの基

地になったというのがありますよね。その辺から発展していったというところがありますね。そういう意味では、比較的新しい部分というのかなり多いと思うのですが、ある意味でいうと新しいまち、そういう印象も私は持っているのですが、この大竹の中でもいいところというか、地域性として自慢できるところはどんなところがあるでしょうか。

私は先ほど伺っていて、皆さんが自分たちのお力でいろいろなことをやられて、社会的な活動が盛んな印象があるのですが、今日も、先ほど西さんがおっしゃっていましたけれども、むしろ、ここは工業系の会社が多いわけですよね。今日出席いただいた方というのは、たまたまかもしれませんけれども、工業系の方は西さんだけで、非常に少ない感じなのですが、逆に、社会的な活動をされている方が、神楽を含めて、非常に多い印象を受けたのですが、どうですか。そういう社会活動みたいなのが盛んなところですか。あまりそういうふうには意識されたことはないですか。

(池 田)

どこもやっていると思いますけれども。

(知 事)

どこもやっていると言えばやっているのですが、この会に誰がメンバーに選ばれているかにもよるのですが、それぞれやっぱり地域性があるのです。ちょっとずつ違うのです。それは皆さん、自分たちでそういうふうにはあまりお感じにならない。池田さん、いかがですか。

(池 田)

どうでしょう。さっき言った、まんざら大竹も捨てたもんじゃない。熱い人はいっぱいいる。これはストーンアートを通じて、石を運んでくれる人とか、いろいろ出てきましたので、熱い人は多いかなと。

(知 事)

なるほど。杉嶋さんはいかがですか。北海道にもお住まいになられて。

(杉 嶋)

私たちはもともと大竹の人間ではないのです。親族は誰も大竹の人はいないので、でも、始めたときから本当にたくさんの方々とともにやってこれたという、そのつながりというのは、やはり本当にいい交わりを持ってこれた19年でしたから、17年の間があいても、全国どこに住もうかといったときに、東京には戻らず、大竹に行こうと考えて来たわけです。戻ったのです。

(知 事)

すばらしいですね。

(杉 嶋)

山あり、海あり、そして川もあり、自然の豊かなことと、何よりも本当に人のつながりがとても温かかったので、大竹に帰ってきました。ですから、そのことを思うと、本当に大竹はすばらしいところだなと、帰ってきて、しかも、1 ヶ月でこういうことを始めることになったということも、やっぱり皆さんとのつながりが温かかったからだと思いますし、やはり大竹はすばらしいところだなと思います。

(知 事)

なるほど。泉さんはいかがですか。

(泉)

私は大竹生まれの大竹育ちではございませんが、結婚して大竹に住んでおります。父の本籍ということもあって、昔から大竹をよく行ったり来たりしておりますが、私は大変好きなまちと言いましょか、非常に温かい触れ合いができるまちではないかと。言葉で人情味あふれると言うのでしょうか。非常に皆様方が素朴で、そのままをぶつけあって生きていけるまちではないかと思えます。

それと、ボランティアにかかわりまして歳月が長いのですけれども、自分で自分たちが何をしたら、例えば青少年のため、まちのため、地域のためになるかというのを認識されるのがとてもお得意で、早いと思うのです。こういうことは自分たちでできる。これは私たちがやれるということを一早く認識をされて、それに参加をくださるので、泥にまみれて汗をかくことに非常に違和感がございません。ボランティアをなさってくださる方の中に入っていて、非常に幸せなときを過ごさせていただいています。こういったまちが、やがては、いつかは栄えるのではないかという期待は非常に持っております。

(知 事)

今も多分、皆さん栄えているというか、幸せに暮らしていらっしゃる。

(泉)

今以上に、まちそのものが、市長さんもおられてこんなことを言うのはあれですが、貧乏でございますので、もうちょっと、貧乏に慣れているほうがいろいろな力をみんなが出せるのではないか。お金持ちの子どもより、貧乏の家に生まれた子どものほうがたくまし

いというのが今の太竹の強みとも言えるのではないかという思いで、皆さん張り切っておられるというふうに私は実感しております。いろいろなまちで、同級生とか、そういったお話を聞いても、太竹のボランティアの力はすばらしいなというのを、自分がその中にいて言うわけではないですけども、やはりそれを常々実感させていただいて、やはり住む以上は誇りに思えるまちだなというふうに思っております。以上です。

(知 事)

ありがとうございます。でも、泉さんがおっしゃるように、今日何回か出てきているテーマですけども、お金とか資源がたくさんあったらそれでうまくいくかという、必ずしもそうではないような感じがしますよね。

(泉)

お金はあるにこしたことはないのですが、お金がなくてもできることはたくさんあって、自分たちの知恵と、そういうのを出し合うということが、また私どもの年代には若返りかも分かりませんし、苦勞していろいろなものをやり遂げていくという喜びが生きる力にもなるかなという思いがしております。

(知 事)

そうですね。すぐに与えられてあると、考える必要がないから、あまりかかわらない。なかったり工夫しなければいけないからこそ、一生懸命考えて、工夫をされて、つながりが深まっているような感じですね。

(泉)

そうですね。池田さんがやっておられますストーンアートなども、あそこがダムに、太竹のまちが沈むときに、そのときの現職の市長さんとある有志の方がすばらしい石を、太竹の記念に何かに使おうと集めておられたのを、それに着眼されて、いろいろといい方向に持って行ってくださるので、恐らく草葉の陰から大変喜んでおられるのではないかと思います。やはり、そういったことを忘れずに、先代が残された遺物と言うのでしょうか、そういったものを大切にしながら太竹のまちをつくりあげていけるというのは幸せではないかと思います。

(知 事)

ありがとうございます。ちなみに、高校生二人は、こういう太竹に住んでいるのですけれども、住んでいてどうですか、若者として、太竹のまちは好きですか。

(上 田)

はい。

(知 事)

大好きだと。こう聞かれて、好きじゃないとなかなか言えないですね。

(岩 脇)

好きです。

(知 事)

実は質問は、高校生の方がときどき参加していただいたときに大抵聞いているのですけれども、これから大学に入って、就職をするときに、大竹だけという狭いのですけれども、広島県に残りたいと思われますか。どこか外に出たいなと思っていますか。

(岩 脇)

広島にいたいです。

(知 事)

上田さんも。

(上 田)

はい。

(知 事)

反応が早かったですね。それはどうしてですか。

(岩 脇)

ずっと住んでいるところなので、広島にいたほうがいいかなと。

(知 事)

なるほど。上田さんは。

(上 田)

私も、生まれてからずっと大竹市に住んでいるので、大竹市も出たくないです。

(知 事)

そうなのですか。それは何でしょうね。大竹の住み心地がいいのでしょうかね。だって17年外で、しかも、大竹出身じゃなくて、17年ほかに住まれて戻ってこられるということですからね。

実は、これを聞くと、広島県外に出たいという高校生がほとんどなのですよ。だから、それは、僕は仕事として、みんなからそういうふうに言われない広島県をどうつくったらいいかというのを一生懸命考える立場になって、それでいろいろ聞くのです。何で出たいのですかと聞くことが多いのですけれども、今日みたいにずっと住んでいるからここがいいということは、ここに住むことが好きだということですよ。そうすると、みんな残ってもらえるのだということがよく分かりました。ありがとうございます。

(洲 上)

会社でも、弥栄ダムをつくるときに、弥栄ダムに携わった東北の会社の方でも、今もそのまま住んでおられて、仕事を大竹でされている方も多いですね。たまたま私も、もともとがサラリーマンだったので、現場へ行って、その方ともどここの現場、ああ知っていますよという話になったのですけれども、やっぱり人とのつながりというのは大切だなと思っています。先ほど知事が言われたつながりというのですね。

(知 事)

それがここは強いのでしょうかね。

(洲 上)

そうですね。例えばお客さんが、私も今カキをやっていますけれども、3月にカキを買いに来たお客さんの顔を覚えておけば、またどこかで会ったときに、おたくの3月のは全然違いますよとか、顔を覚えて、名前を覚えれば一番いいのですけれども、たまたま、知事が南アフリカのマンデラさんの映画を見られたかどうか分かりませんが、あれを見ていると、そういう言葉や感動するシーンがすごくあったのです。白人の選手の名前を全部頭に入れて、自分が名前を言って握手をすとか、そういうのが自分と共通している面があったのですけれども。

(知 事)

そういういろいろな形でのつながりが深いというか、それを大事にされている地域ということなのですかね。ありがとうございます。

それでは、せっかくの機会なので、何か御質問とか、こういうことを聞いてみたいとかありましたら、では洲上さん、お願いします。

(洲 上)

先ほど西さんからもお話があった大竹の工場の場合には、ペレットだとか、液状のもので目に見えない。ただ、今、よくテレビで工場の見学ツアーというのがあって。

(知 事)

ええ。産業観光と言うのです。

(洲 上)

広島だと、マツダ。目に見えるものですね。あとカルビーもありますけれども、大竹ではそういうものがないから、ペレットがあるのであれば、私の違う意見ですけれども、ダイカストマシンって分かりますか。

(知 事)

ダイカストマシン、鋳物。

(洲 上)

はい。そういったものがあればペレット状のものが製品にできるのですよ。そうすると、大竹の小学校、中学校から社会見学に来られても、そういう工場見学ツアーというのをテレビでよく見るのですけれども、さっき言ったせつかく大竹にいろいろな工場がありますから、工場見学ツアーといったものができればまたいいかなと思っているのですけれどもね。

(知 事)

私の意見を言っていていいですか。結構コンビナートをライトアップしたら、夜、きれいなのではないかと。

(洲 上)

そうですね。

(知 事)

これはどこか私はよそで見たことがあるのですけれども、コンビナートのパイプとかタンクとかがずらっと並んでいて。

(洲 上)

今は名前は違いますけれども、川崎製鉄所とか日本鋼管でもよく桜の季節なんかにそういうのをやっているところもありましたね。

(知 事)

そうですね。西さん、お願いします。

(西)

今のライトアップなのですが、是非、夜、瀬戸内海側から来ていただいて、宮島の裏を回っていただきましたら、岩国側から大竹にかけて、大変すばらしくきれいです。大野の宮浜を過ぎて、大竹を夜見ますと、ものすごくでっかいまちに見えるのです。夜見られたことはございますか。

(知 事)

通ったことはあると思うのですが、あんまり気が付かなかった。

(西)

昼間見ると、工場で煙が出ているのですけれども、夜見ると、ものすごくきれいなまちに見えますから。

(知 事)

では、事実上ライトアップになっているということですか。

(西)

なっていますね。工場自体は。

(知 事)

工場自体はね。照明がついていますからね。

今、ちょうど広島湾のライトアップというのをやっています、宇品から船を出して、夕方ライトアップを見ながら来るのですけれども、もうちょっとこっちに来たら、これまたこれでいいのが見えるかもしれないということですね。

(西)

そうですね。昔、大竹港、今のあこがれみなどができたときに、銀河をあそこにつけまして、夜、そういうクルーズを、一回私は参加したことがあるのですけれども、大変すば

らしい景色でございました。

(知 事)

そうですか。それはちょっと伝えておきますね。ありがとうございます。
ほかはいかがでしょうか。御質問とか。

(洲 上)

お願いがあるのですけれども、カキの話ばかりしてもおもしろくないでしょうけれども、
今、県が11月にカキの日というのをつくっているのです。

(知 事)

11月に。

(洲 上)

はい。それだと、お客さんに詐欺じゃないですけれども、そのころのカキはよくないの
です。先ほどのお話にあった3月です。それを変えていただきたいというのが一番です。

(知 事)

カキの日って、どこが決めるのですか。県ですか。県が決めているのかな。漁協ですか。
大井さん、お詳しいのでは。生産者組合ですか。

(大井県会議員)

カキの業者が集まって。

(知 事)

では、それは協議をしてみましようか。何か理由があって11月になっているのだと思
うのですけれどもね。

(洲 上)

先ほど私がこっちのカキがいいですよと、どこも同じことを言われると思うのですけれ
ども、本音を言うと、私どもが東京の市場に出しても、地御前さんとか、よそに比べて
も、私どものカキのほうが高いです。だから、品質的にはこっちが一番いいと思っていま
す。その辺もちょっとアピールしていただければ。

(知 事)

分かりました。認識をきちんと正しく持つようにします。

ありがとうございます。今のカキの日は、多分シーズンの初めか何かで、そこから盛り上げるためにやっているのではないかという気もしますけれども、それはちょっと話をしてみる価値はあるかもしれませんね。

(洲 上)

ですから、私どもで大竹のカキをイメージするのに、単独でカキ祭りをやるのですよ。大竹の駅前だとか岩国の商店街だとか、お客さんが何で3月にカキがあると思われるのです。それはスーパーで買ったカキしか食べたことのないお客さんがそう思われるのです。実際に生産者のカキを食べると、絶対に次、買いに来ますから、味が全然違うとお客さんが言われます。やっぱり私どもも今言ったように3月ごろが一番おいしいのですよということで、今、単独で、単独では力的には非力なものですから、もっと皆さんの協力も必要なのですけれども、そういった形で私どももカキ祭りというのをやらせていただいています。

(知 事)

ありがとうございます。今、瀬戸内海の道構想というのをつくってしまして、その中でもカキ、海産物は非常に大きな要素で、カキ祭りみたいなものもできたらいいなという議論いろいろあるのですけれども、是非各地のカキ祭りの一つとして盛り上がるようにしていただければすごくいいかなと思います。ありがとうございます。

ほかの方、いかがですか。湊さん、お願いします。

(湊)

答えにくい質問かも知れませんが、どうしても私が投票のときに湯崎知事に入れた後。

(知 事)

ありがとうございます。

(湊)

すぐ、がっかりさせられたことが一個あったのです。大竹でも人件費を削減されていますよね。なのに、どうして広島県は削減を復活させたのでしょうか。次回の知事選にも、私が湯崎知事に入れたくなるような答えを是非聞かせてほしいのですが。

(知 事)

いや、削減をやめたということはないですね。削減をやめたということではなくて、給与の臨時カットというのを、これは臨時なので、臨時なのにずっと続けていたわけなので、11年ほど。これはちょっとお約束が違うのではないですかということで、今年は少なくともカットをお休みにしました。人件費を上げたわけではないのです。本来払うべき人件費、払うというふうになっているものを払わないできたものを、きちんと一回払いますというふうに今年したのです。

なぜそうやっているかという、今年1年かけて人件費も含めた財政再建のあり方という計画をつくっているのです。それをやる時には、当然その人件費をどうするかということについての議論がされなければいけないわけですね。ところが、それをやっているのに、ずっと負担だけは一方的に課しておいて、しかも、一番カットしやすいわけですね。県議の方も賛成の方が、反対の方もいるのですけれども、しわ寄せをしやすいわけですね。なので、それはきちんと議論する上でいったん白紙に戻して、きちんと議論して、これからまた向こう先のことをやりましょう、考えましょうと、そういうことなのです。

(湊)

では、将来は下げる可能性もあるということですか。

(知 事)

そうですね。それは可能性というか、人件費をどういうふうにもきちんと管理をするとか、していくかということ是非常に重要なことですので、それをきちんと議論を今年するということで、今、それは進んでいるところです。

(湊)

分かりました。次回も私は湯崎知事に投票できるようなことを期待しておりますので、よろしくをお願いします。

(知 事)

ありがとうございます。

はい。

(中本 (一))

すみません。御存じのように山の中に住んでいるものです。一番困っているのがイノシシの被害なのです。私たちも若い皆さんと一緒に安全・安心な建物をつくって、子どもたちと会話をし、3世代一緒に住める村にしたい。そうやって私たちにできることは、私たちが頑張っていてやっています。ただ、どうにもならないハード面で、何とか協力していただ

ける、手を貸していただけることができましたら、ひとつよろしくお願ひしたいと思ひます。よろしくお願ひします。

(知 事)

はい。ありがとうございます。鳥獣被害、特にイノシシについては、かなり県としても力を入れて、フェンスをつくったりとかいろいろやっているのですがけれども、現実なかなか追いつかない状況になってきているということなのです。ここ数年、かなり予算を押さえてやったのです。それ以上に増えてしまっているという、これは森づくりというか、林業のほうの対策も含めてやらないと、抜本的にいろいろやらないと難しいのかなという感じはしております。

(中本 (一))

よろしくお願ひします。宮島からもシカが泳いで渡ってきていますので、よろしくお願ひします。

(知 事)

そうなのですね。はい。ありがとうございました。
杉嶋さん。

(杉 嶋)

広島県は全体的にブックスタート運動というのをやっておられるかなと思って、赤ちゃん、幼児のときの本当に小さいときに絵本を手渡していく。その一番大事なところの活動が全国的には広まっていますけれども、広島県でも是非、県としてその活動を進めてもらえたらうれしいなと思ひました。

もう一つ、これには親と子の広場とありますが、親と子の本の広場あいいく館です。

(知 事)

すみません。失礼しました。今、お配りした名簿の中ですか。

(杉 嶋)

そうです。参加者名簿です。

(知 事)

それは失礼しました。私の手元には親と子の本の広場になっているのですがけれども、ちょっと配布してあるものが落ちてしまって、申し訳ありません。

閉 会

(知 事)

それでは、そろそろ時間になりましたので、ここでまとめたいと思います。

今日は、本当にありがとうございました。繰り返しになりますけれども、土曜日で、しかも、この夏の晴天の気持ちのいいときに、皆さん遊びに行かれないのではないかといいところですが、こうやって長時間いろいろ御意見をお伺いできて、本当にうれしかったです。ありがとうございました。

今日、まちの中、市の中をいろいろ拝見させていただいて、またこうやってお話をお伺いして、最後、上田さんと岩脇さんのお話で、住みよいまちなのだなというのが本当によく理解できました。こういうふうに広島県のたくさんの人が、できるだけ多くの方がそういうふうに感じていただくのが最終的にはいい広島県をつくる。広島県の県政を高めていくというふうになるのではないかと思いますので、私もそういうふうに感じていただけるように、今、言っておりますのが、広島で生まれ、育ち、住み、働いてよかったと思える広島県、そういうものをつくっていきたいと言っております。本当にそうなるように私も頑張っまいるたいと思いますので、1票投じていただくかどうかはまた別として、御支援、御協力いただけると大変ありがたいと思います。本日はありがとうございました。

また、傍聴の皆さんも、長時間、本当にいつも思うのですけれども、我々こうやって話しているからいいのですけれども、後ろでずっと聞いていると結構つらいのではないかと思うのです。長い間お付き合いいただきまして本当にありがとうございました。

それでは、今日はこれにて終了とさせていただきます。どうも改めましてありがとうございました。